ト'99, 34-35, 日本出版労働組合連合会, 東京.
The Federal Ministry for the Environment, Nature Conservation and Nuclear Safety. 2000. Germany's National Climate Protection Programme. The Federal Ministry for the Environment, Nature Conservation and Nuclear Safety, Berlin.
The LTI-Research Group. 1998. Long-Term Integration of Renewable Energy Sources into the European Energy System. Physical Verlag, Heidelberg.
和田武, 1990, 地球環境論, 創元社, 大阪.
和田武, 1992, 大学環境教育研究会の発足に当たって, 大学環境教育, 1, 2-3.
和田武, 1999a, 環境問題を学ぶ人のために, 世界思想社, 京都.
和田武, 1999b, 温暖化防止のためのエネルギーシナリオ, 環境展望1999-2000, 81-102, 実教出版, 東京.
和田武, 1999c, 小中高校の環境教育を歪める教科書検定と大学の役割, 大学環境教育, No. 21.

行動する学生を生み出す大学環境教育

東京国際大学国際関係学部　下羽　友衛

1　はじめに

下羽ゼミにおいて環境教育（学習）を切り口としてアクティブな市民（地球市民）育成の教育に取り組み始めたのは、ちょうど大学環境教育研究会がスタートした1992年である。それ以来、当ゼミの研究・実践活動は、本研究会の発展とともに歩み、市民育成の成果を少なからず収めることができた。(詳細については参考文献を参照)

そこで、本稿では当ゼミで実践してきた環境教育（学習）を取り上げ、それを基に大学環境教育研究会の今後の課題について若干触れてみたい。

本稿でいう市民とは、「操作されやすい大衆との対比で、自発的・主体的に政治に参加する人々」を指す。そして市民には地球規模で地球的な取り組みを必要とする、いわゆる地球的諸問題が私たちの生活と不可分の関係にあることから、同時に地球市民の役割も期待されている。ここでは地球市民を「私たち生活者の利益を守るため、私たちの生活に関わる様々な問題を地球規模で考え、問題解決のために自発的・主体的に私たちを取り巻く社会に働きかけていく人々」という意味で用いている。

市民は、市民団体や市民組織と同様に広い意味での「市民社会」の構成要素である。そして、冷戦終結後「市民社会」は平和、開発、環境、人権などの領域における問題解決能力に国家や国際機関の限界性がみられる中で、次第に重要な役割を果たすようになってきた。その意味で、環境教育（学習）によって市民の育成を図るということは、言うまでもなくそこに政治性が含まれているということである。

2　環境教育の課題

大学生活4年間の学びの中で最も大切なものは、自分の持ち味ある生き方を見つけ、その実現に必要な力を身につけること、同時に私たちの生活に関わる問題を実際に解決していくことのできる力を培うこと、であると考えている。環境問題は、私たちの生活に関わる諸問題の一つであり、環境教育は環境とそれに関連する問題に対して発生予防・解決する力、すなわち現実を変えていく力を培うことがその主たる目的になろう。

ちなみに、1975年のベオグラード憲章によれば環境教育の目的は、「環境とそれに関連する問題に気づき、関心をもつとともに、当面する問題の解決と新たな問題発生の未然防止のために個人および集団としての具体的活動に必要な知識、態度、技能、意欲、実行力などを身につけた地球市民を育てること」にある。

この目的の実現に対して日本の環境教育はどう応えてきたのだろうか。若者たちの実態をみると、環境教育のあり方が少なからず問われているような思いがする。

狭い意味での環境問題には関心があるが、それに関連する他の諸問題へと関心が広がらない。環

境に関する知識はあるが、それが必ずしも行動に結びつかない。行動はするものの、それが問題発生の予防と問題の解決に有効な行動とはならない。市場における消費者としては積極的に行動するが、同時に有権者・納税者・労働者・投資家としての社会への働きかけがあまりみられない。

このような若者を関心－知識－行動－問題の解決・問題発生の予防へとつなげていけるような、いわゆる目的合理性をもった有効な学び・教育をどう創造していくことができるのか、ここに環境教育の課題があるように思われる。

3　どんなイメージの「学生」に育てたいのか

95年夏のゼミ合宿にハイデルベルク大学（ドイツ）の学生６人が参加して日本とドイツの市民性の違いについて議論をした。そのとき、飲み会で出された紙コップ・皿をめぐって、ドイツ人学生が「あなた方はなぜ紙コップ・皿を使うのか。私たちは使用しない。」と、ゼミ生に問いかけたのである。

ドイツ人学生は彼らがそれを使用しない理由づけを、次のように述べるのであった。「第１に紙コップ・皿はパルプから作られ、それを使用することは森林伐採に、そして地球温暖化の問題につながる。第２にそれらは使用後、廃棄・焼却され、灰は処分場へと持ち込まれる。そのためその処理工程で、そこに従事する人々、焼却施設、処分場、運搬車、燃料等がその分、必要とされる。第３には、同時にその工程で地球温暖化現象をもたらす二酸化炭素、硫黄酸化物等を排出し、その結果私たちの生活に悪影響を及ぼす」というのである。

要するに、彼らは地球温暖化という環境問題、すなわちその問題が彼らの生活に与える不利益、その対策へのコスト、そして森林という資源はもとより紙コップ・皿の廃棄・処理に要するあらたな資源と税金の浪費、という視点から紙コップ・皿は使用しないというのだ。自分たちの生活をより良くしていくために社会へ働きかけ、環境問題発生の未然防止とともに資源と税金の有効利用を図ろうとする、彼らの日常生活におけるごく当たり前の行動は、実に分かりやすく目的合理性に富んでいる。

ちなみに、93年にゼミで実施した日米独の大学生の意識調査、「環境保護のためなら高い商品でも買いますか」に対して、①「５割より高くても買う」、②「５割高までなら買う」の回答率はドイツ48.1（①16.7②31.4）％、アメリカ38.6（①10.8②27.8）％で、日本は12（①3.1②8.9）％であった。

こうした生活者の視点から社会の問題をとらえ、問題解決のために自発的・主体的に行動できる市民（地球市民）をどう育成していくことができるのか。

4　学習意欲と行動を促す教育・学習方法のポイント

広い意味でのいわゆる「ゼミ」活動をすすめるにあたって、主に次のポイントを重視してきた。

①私と世界をつなげて考え、実践する「生活感」のある教育・学習

地球的諸問題を自分自身の問題としてとらえ、「日常生活－学内－川越－埼玉－日本－アジア－世界」というつながりの中で実践活動を行う。自分の生活に関わる問題として理解できるということは、学習意欲の向上、問題発生予防・解決に役立つ知識、態度・価値、技能の習得、問題解決への有効な行動を促す傾向にある。

②実社会で必要な能力の育成に連動する教育・学習

ここでいう能力とは、課題を発見する力、解決案を策定する力、関係者・関係機関にそれを提示する力、協力を得てそれを実施する力を意味する。このポイントを重視する背景には、学生とのひとつの質疑応答がある。学生への問いかけ「なぜ日本の学生は勉強しないのだろうか。」に対しての多くの理由付けが「大学での勉強は社会に出てから役に立たないから。」というものであったからである。

③参加型・問題解決型の教育・学習

私たちの生活に関わる地球的諸問題に対して様々なレベルでの問題解決を図り、その実践活動から何らかの成果を実現するという作業に重点をおく。その作業過程において学習者に行動を促す好循環プロセス（行動→社会への影響・社会の変化→感動・自信→行動）を体験学習させることによって、「私たち市民は決して無力な存在ではなく、社会変革の可能性をもった主体である」という実感をもたせる。

この点を最重視するのは、学生に「なぜ日本の国民の多くは、自分たちの生活をよりよくしていくために、社会に積極的に働きかけようとしないのか。」という問いに対して、もっとも多かった答えが「自分一人が行動しても世の中（社会）は変わらないから。」という理由であったことからである。

したがって、問題解決の具体案を策定していくための道具としてさまざまな理論（分析枠組）を学ぶことに力点をおく。その上で、実際に具体案を私たちを取り巻く地域・国内・国際社会の関係者・関係機関に働きかける。そして、その発信活動の成果を自己点検・評価し、それを次の政治過程へ役立てていく。私たちは、こうした一連の教育・学習過程において「ゼミ」組織を市民社会を構成する学生団体、すなわち一つのNGOとしてみなしている。

④現場体験（国内外）型の教育・学習

国内外の現場体験学習を重視する。とりわけ平和・開発・人権・環境・貧困などの問題群が構造化しているアジアの現場は、日本との関係も深く、国内の現場では学習不可能な部分を補完する意味で欠かせない。空爆が続くアフガニスタンにおける環境とそれに関連する諸問題を予防・解決するにはどうしたらよいのか。同様にフィリピンのパヤタスのようなゴミ集積場にかかわる諸問題、すなわち環境問題は、どう予防・解決していくことができるのか。それらの問題への関心、解決したいという欲求、学ぶ意欲、そして行動へのモチベーションは、そのような現場体験から高められていく。

⑤問いかけ型の教育・学習

学生の自主的参加を促す学習形態をとる。たとえば、ディスカッション形式、民主的な教育・学習環境（学生間、教師と学生間の民主的な意思決定方式）、教師が一方的に教え込んだり、考え方・生き方を強要したりしない、教師が上から監督・指導するというよりも必要に応じてヒントを与える。

参加によって市民としての基本的資質や社会で必要とされる能力が得られること、すなわち参加＝利益という図式が理解できれば、自発的・主体的に参加する傾向がみられる。また、夢を実現しようとしている魅力的な先輩など、いわゆる「あこがれの存在」がいる場合においても参加意欲がみられる。

したがって参加は原則的に強制せず、「ゼミ」活動は学生主体で行われる。

5　「ゼミ」活動の具体的内容

「ゼミ」活動は図１に示されているように理論学習、現場体験学習、発信活動学習の三本柱から構成されている。それぞれの学習の相互作用のもとで「地球市民」としての基本的資質・能力が培われている。

そして、それぞれの学習には様々な部分活動がある。同様に、それらの部分活動間にも相互作用が働いており、「学び」の相乗効果を高めることができる。

次の事例は、前者が現場体験学習の中の一つの部分活動であるスタディーツアーからみた「学び」関係図（図２）であり、後者が学生の「ゼミ」活動への参加と学びの「カルテ」（表１，２）である。

[事例]　フィリピン・ラグナ湖タリム島スタディーツアー（2001年3月）

＜現場の特色＞

東南アジア最大の湖であるラグナ湖の湖水汚染は、アジアの公害として世界的に知られている。湖水汚染の原因は、周囲の工場からの排水、生活排水、周辺部の森林伐採による土砂流出などがあ

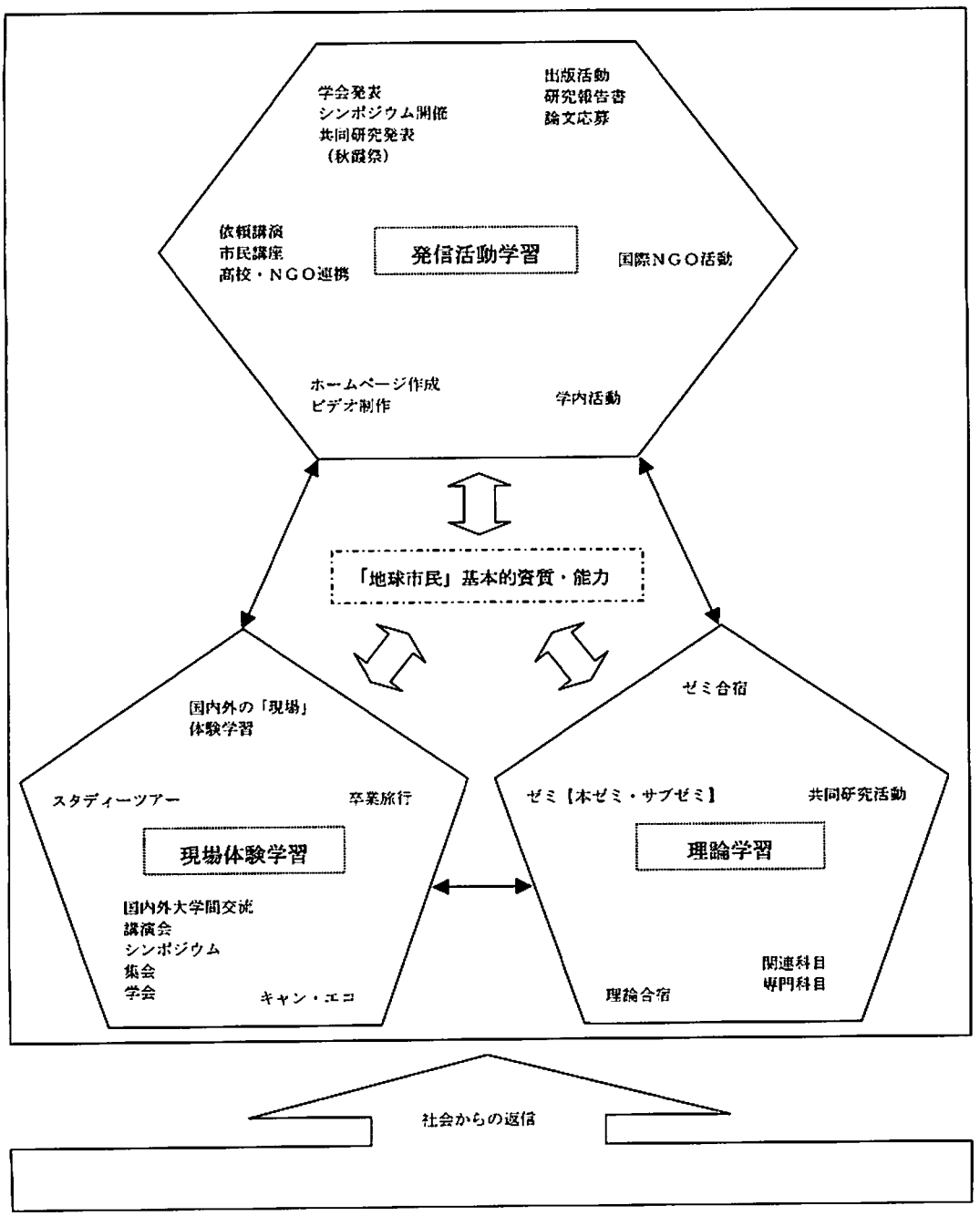

図１　下羽ゼミ「学び」モデル

げられ、漁民の生活は汚染による漁獲量の減少で深刻な状況にある。ラグナ湖周辺部の開発には日系企業の進出や日本のODA（政府開発援助）が深く関わっており、私たちとラグナ湖の湖水汚染は無関係ではない。またラグナ湖周辺の各地は太平洋戦争中、日本軍によって現地住民の大量虐殺

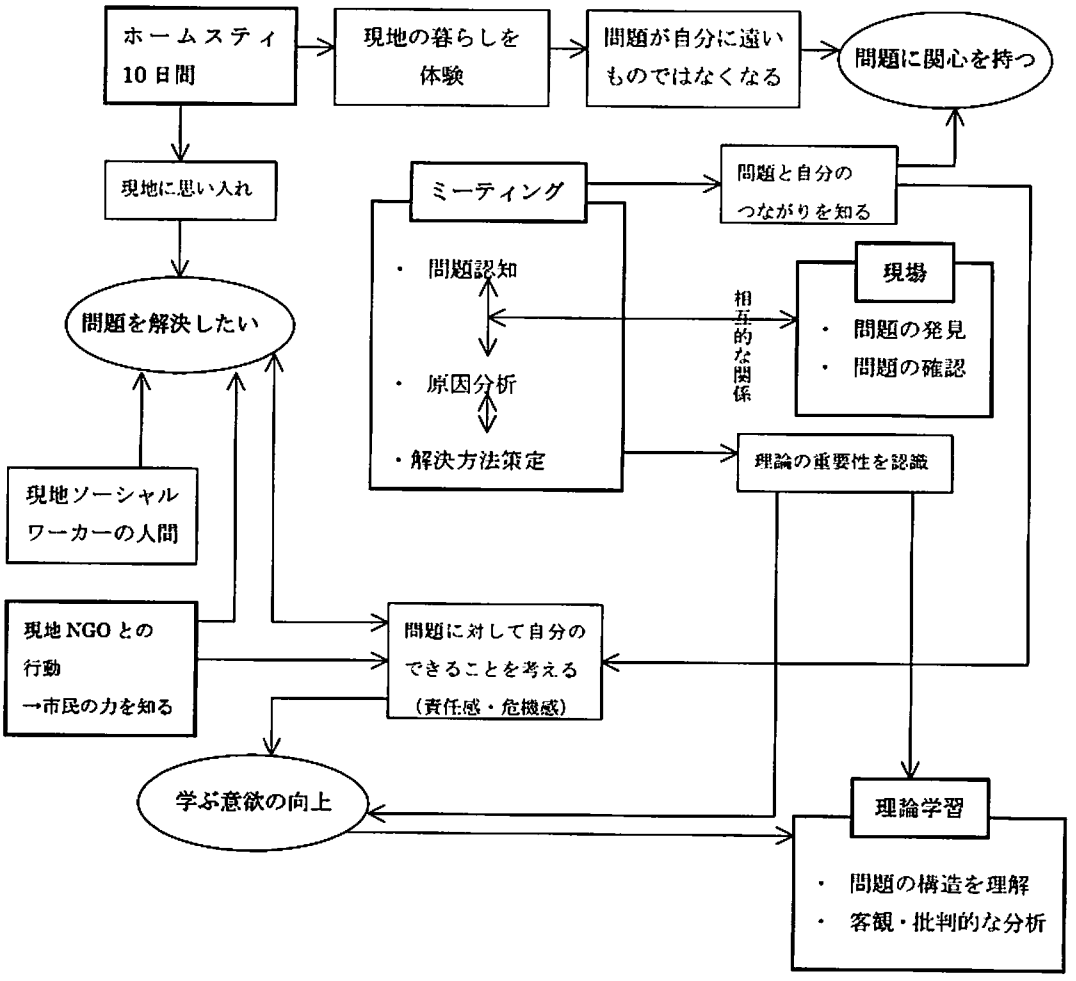

図2　フィリピン・ラグナ湖タリム島スタディーツアーの「学び」関係図（参加学生作成図を一部修正）

が行われた現場でもある。

＜学びの成果＞

参加したほとんどの学生が問題への関心、問題解決への欲求、学習意欲を高めることができた。

ちなみに、「下羽ゼミ生の「地球市民」の育ち方に関する調査（1997年度）」によると、国内外で行われた現場体験学習は、学習意欲（81％）とともに、行動へのモチベーション（81％）を高めている。

［事例］学生の「ゼミ」活動への参加と学びの「カルテ」

二人の学生の学び「カルテ」（表1、2）を通して1997年度からの「ゼミ」活動の内容が具体的にわかる。同時に、学生の市民（地球市民）としての成長過程がみられる。これらの学び「カルテ」（本人作成）は環境教育・学習のうえで「教える側」と「学ぶ側」の双方にとって貴重な資料となっている。

6　むすびにかえて
―大学環境教育研究会の課題―

最後に、以上の当ゼミの環境教育（学習）の実践から、今後の大学環境教育研究会に提起できると思われる若干の課題を挙げたい。

1）環境問題史から学ぶ大学環境教育

例えば、環境問題の発生予防と解決の過程で、

表1　学生A「カルテ」(2000年度卒業)

初めて訪れた現場体験学習では、何がなんだかわからない状況でしたが、先輩とともに賛成・反対両派の方々のお話を聴くほか、新聞社を訪れ夜遅くまで記者の方と語るなど、貴重な体験ができた。産廃処分場建設予定地の大きさと、木曽川との近さに衝撃を受けた。住民投票の熱気に圧倒された。

あまりに膨大な豊島の産廃不法投棄の量に、言葉を失った。石井亨さんをはじめとする住民の方々が、高松や東京まで自腹で出かけて行き地道に活動する姿を見て、人事のように勉強させてもらいに行っている自分のことを恥ずかしく思った。
自分と社会の問題との繋がりを真剣に考えるようになった。

初めて訪れた発展途上国だったことと、国内のゴミ問題からみえてきた社会構造だけで混乱していたこともあり、かなり精神的に辛い現場体験学習だった。
戦跡の丘に登って戦争で死ぬとはどういうことかを考え、鋼精錬工場を見学して、工業化による発展をさびしく思ったりした。極端な貧富の格差を目の当たりにして、南北問題の根深さと解決の困難さに無力感を感じたが、フィリピン国立大学「地域保健・医」学部レイテ分校の学生による地道な地域保健・医療活動の姿に勇気付けられた。
この姿から、自分も将来的に間接的にでも様々な社会問題の解決に関わり続けたいと思うようになった。

	3年間の学び（ゼミでの学びを中心に）
1997年度 (2年次)	
4月	ゼミ紹介シラバスにあった「地球市民」という言葉に惹かれ、ド羽ゼミに入る。
6月	・岐阜県御嵩町にて、産廃建設の是非を問う日本初の住民投票を現場体験学習する。
8月	・香川県豊島の産廃不法投棄現場を現場体験学習する。後に県議会議員となる廃棄物対策豊島住民会議代表の石井亨さんをはじめとする住民の方々からお話を聴く。豊島小学校でのシンポジウムに参加。 ・岐阜県御嵩町を訪れ、住民投票以後の動向について調査。柳川町長にお話を聴く。 ・ゼミ夏合宿
9月	・米グリーンピースの科学者バット・コスナーさんのくぬぎ山周辺廃棄物中間処理施設視察に同行。お話を聴く。
11月	・学園祭で「廃棄物問題と市民」と題してシンポジウムを行う。学生パネリストとして参加。 ・キャンパスエコロジー活動に参加し、学園祭から出るゴミに驚く。
12月	・気候変動枠組み条約締約国会議（COP3）に伴って行われるシンポジウムに参加。環境外交の動きやNGOのパフォーマンスを目の当たりにする。 ・ごみ問題さいたまの会と下羽ゼミ共催の「ゴミ・埼玉発　どこへ？～ゴミの広域移動の現状と問題点～」公開シンポジウムに参加（先輩川村尚寿氏の発表を聞く、テーマは「廃棄物問題の構図と市民　豊島・御嵩・くぬぎ山そして学内の現場を通って一」）
2月	・ゼミ4年生追い出しコンパ ・アジア環境ジャーナリスト交流セミナーのくぬぎ山産廃中間処理施設の視察に同行。
3月	・フィリピンスタディーツアー - レイテ島パロ市の戦跡、バサールの銅精錬工場など見学。フィリピン国立大学「地域保健・医」学部レイテ分校の学生による地域医療の現場を見学。 - マニラではスモーキーマウンテン跡地、ストリートチルドレンシェルターを訪問。スモーキーマウンテンから退去させられた人々の住宅地に1日ホームステイする。日本大使館にて藤井一等書記官、開口政務調査員から対比ODAなどについてお話を聴く。 ・ゼミ春合宿
1998年度 (3年次)	
5月	・JICAを訪れODAについてお話を聴く ・日本環境教育学会に共同発表者として参加
6月	・『学び方・ライフスタイルをみつける本－アクティブな地球市民になるためのゼミ』（太郎次郎社）原稿執筆 ・ハンセン病患者の国際シンポジウムに参加
8月	・法政大学にて行われた研究会で「現場体験学習による環境教育のあり方」を発表 ・香川県豊島に現場体験学習 ・広島原爆資料館を訪れる。
9月	・長野県の産廃現場見学ツアーに参加。案内は関口鉄夫さん（長野県廃棄物問題研究会）。 ・ゼミ夏合宿
10月	・DAWN（Development Actions for Woman Network）の日比混血児によるミュージカルを大学で聞く。フィリピンスタディーツアーの報告も行う。
11月	・学園祭にて「廃棄物問題と市民」と題してシンポジウムを行

	う。 ・京都府立医大での地域医療シンポジウムに参加。色平哲郎先生のお話を聴く。
12月	・日韓歴史フォーラムに参加
2月	・ゼミ4年生追い出しコンパ ・『私たちが変わる、私たちが変える　環境問題と市民の力』学内・国内・海外での現場体験学習から。（リサイクル文化社）の出版に編集委員として関わる。
3月	・フィリピンスタディーツアー
4月	・ゼミ春合宿
1999年度 （4年次）	
5月	・「足尾鉱毒事件と日口工沿に学ぶ」と題して、足尾にて武蔵工業大学の学生らと現場体験学習を行う（インターカレッジ企画）。 ・日本環境教育学会大学環境教育研究会シンポジウムにて発表
6月	・武蔵工業大学を訪れISO14001取得の大学施設を見学
7月	・『私たちが変わる、私たちが変える　環境問題と市民の力』出版記念毎朝企画、野村かつ子氏公開講演会開催 ・福島県小野町の一般廃棄物処理施設を現場体験学習
8月	・韓国で行われたFDLAP（Forum of Democratic Leaders in Asia-Pacific）のワークショップに日本の代表として参加。金大中韓国大統領のお話を聴く。光州事件の現場視察。
9月	・東京電力福島原子力発電所を見学
11月	・学園祭にて「市民をどう育てるか～環境問題と市民性～」と題した公開シンポジウムにコーディネーターとして参加 ・三重県立小俣高校生徒の発表を見学・交流 ・デビッド・サンダース氏講演会に参加
12月	・大田堯氏をお招きしての公開シンポジウム「生きる力と学び～高校と大学をつなぐ～」にコーディネーターとして参加
3月	・屋久島に卒業旅行。5時間かけて縄文杉に辿り着く。
2000年度　4月	同志社大学大学院総合政策科学研究科に進学

> 職前から消費者運動にかかわり、人生を通して生活者の視点からものを考え、問題解決のために活動し続けてきた野村かつ子さんの生き様に大きな影響を受けた。
> ラルフ・ネーダーによる市民の5つの側面も、教えていただいた。

> アジア太平洋の民主化に関わるNGOの人々たちとワークショップに参加し、意見交換・交流をすることができた。
> 光州事件で亡くなった人のお墓や資料館では、つい20年前のこととは思えない残酷な事件にショックを受けた。
> 金大中大統領のスピーチを聴いて握手してもらえたことも、大きな勇気になった。昨年大統領が北朝鮮を訪れて歴史的な会談を行ったときには、かなり感動した。

国家機関・自治体、企業、市民・市民団体、あるいは教育者・研究者などの関係主体がどのような役割を果たしてきたのか。それを通して現実を変えていく力をもった環境教育のあり方を考える。四大公害の事例はひとつの適当な題材になろう。

＊ 昨年度のシンポジウムで藤岡貞彦氏が「産業革命以来の環境問題の展開が長い歴史を持っている以上、環境教育は環境問題史探求の性質をもつ」と指摘された。

2）現在直面している内外の環境汚染の現場から学ぶ大学環境教育

例えば、公共工事で環境破壊が行われている現場を題材とし、そこで公共の利益とは何かについて考えてみる。同様にアジアの環境問題の現場から日本との関係を構造的にとらえ、私たちに何ができるかを考えてみる。

3）政策提言をはじめとする実践活動から学ぶ参加型・問題解決型大学環境教育

4）NGOとの連携の中で学ぶ大学環境教育

環境問題の発生予防と解決のための具体案の策定と実践からの学びの過程で、NGO関係者の果たす役割は大きい。今後ミニシンポジウム等においても、NGO関係者を含めた討論が望まれる。

5）「学ぶ側」（学生）と「教える側」（教員）が枠を越えて共に学び合う「大学環境共育」

以上の課題は、あくまでも国際政治学を専門分野とする立場から提起したものである。したがって、それらの課題提起は包括されたものではなく、不十分であることは言うまでもない。

参考文献

東京国際大学下羽ゼミナールⅠ～Ⅳ編著，1994，未来への発信／学生の環境問題報告：国際協力のあり方とNGOの役割，くろうじん出版事務所．

下羽友衛編，1998，学び方・ライフスタイルをみつける本：アクティブな地球市民になるためのゼミ，太郎次郎社．

表2　学生B「カルテ」(2001年度卒業)

2年間の学び(ゼミでの学びを中心に)

1999年度
(3年次)

4月
- 下羽ゼミに入る
- 大学の講義で「国際政治学」、「地域紛争論」を受講(理論学習)

6月
- 現場体験学習「足尾鉱毒事件と田中正造に学ぶ」
- 日本環境教育学会へ参加(先輩上田泰史氏の発表を聞く、テーマは「現場体験学習による環境学習のあり方」)

7月
- 『私たちが変わる、私たちが変える　環境問題と市民の力／学内・国内・海外での現場体験学習から』(リサイクル文化社)出版記念特別企画、野村かつ子氏講演会
- 現場体験学習として地元福島の小野町(一般廃棄物処理施設)を訪問

8月
- ゼミ夏合宿

11月
- 学園祭で「これからの市民をどう育てるか」と題して公開シンポジウム開催、キャン・エコ活動
- 千葉県小金高校の総合学習「環境学」の公開授業へ参加・交流

12月
- 公開シンポジウム「生きる力と学び―高校と大学をつなぐ」にパネリストとして参加

2月
- ゼミ4年生追い出しコンパ(「環境問題を若者にわかってもらうために」と題して議論)

3月
- フィリピンスタディーツアー
(戦争と平和、人権、環境、開発をテーマにマニラ、サマール島、レイテ島を訪問)
- ゼミ春合宿

2000年度
(4年次)

4月
- 『月刊むすぶ―自治・ひと・くらし』(ロシナンテ社　No.352 2000年4月)にて、「国際政治の視点から環境教育を考える」、「若者に環境問題をわかってもらうために―下羽ゼミにおける討論会から」を執筆
- 「地域紛争論」、「国際NGO論」を受講(理論学習)

5月
- 日本環境教育学会で「若者に環境問題をわかってもらうために～現場体験から学ぶことの教育的意義～」をテーマに発表

7月
- ホルスタイン合宿(理論学習合宿)
- ゼミ夏合宿
- Atitipalo Visual Arts Group 絵画展開催

8月
- フィリピンスタディーツアー
訪問先はTIPCO(リサイクルの会社)、バタンガス、バヤタス、トンド地区、リニス・ガンダ(リサイクルショップの連合体)、国際協作研究所、リマ工業団地、DAWN(人権NGO)

9月
- ODA関連省庁・機関訪問(外務省、大蔵省、経済企画庁、JICA、JBIC)、国際協力プラザ訪問
- 第5回実践NGOカレッジ(主催：シャプラニール＝市民による海外協力の会)にて、ゼミを代表して「地球市民になる」をテーマに講演

10月
- 対フィリピンODA政策提言に向けての集中学習
- 「DAWN」座上公演にて国際協力NGOとしてのゼミ活動を発表

11月
- 学園祭にて「国家の未来を切り拓く市民・NGO」と題して公開シンポジウムにコーディネーターとして参加

12月
- 省エネ・オピニオンリーダー懇談会(主催：関東通産産業局)へオピニオンリーダーとして参加

1月
- 尾崎行雄記念学生論文コンクール(主催：尾崎行雄記念財団)にて文部科学大臣賞受賞、テーマは「国家の未来を切り開く―私たちの国際NGO・NPO活動」(『世界と議会』2001年4月号に掲載)

2年次の米国留学を終え、国際政治学を思いっきり勉強したい！そんな思いで下羽ゼミに飛び込んだ。しかし、「君の勉強は本当の学びではない」とのゼミの先輩の一言。その「学び」の意味もわからないままゼミ活動、大学の講義を無難にこなした。

足尾銅山は初めての現場体験学習。もじかで見る荒山(鉱毒による)に驚いた。教科書の中の足尾鉱毒事件は現在進行中なのだ、と痛感した。

地元(福島)への現場体験学習から自分が地元のことを何も知らずにいることに気付かされ恥ずかしい気持ちになった。さらに、そこで処理されているゴミのほとんどが関東圏に住む自分たちのゴミであることを知り愕然とした。問題は小野町1万3千人だけの問題ではなく、関東圏に住む300万人の問題でもあるのだ。
そこで、私たちには問題解決のために何ができるのか？学園祭での発表は自分たちの問題解決のための提言なのだと気付いた。自分の学びの意義がわかってきた。

フィリピンスタディーツアーでは、その貧しさが国内の要因のみならず、国外要因としての私たちの生活、さらにはグローバルな市場経済化という構造下で助長されていることを学んだ。この時、国際政治・経済の文脈の中でフィリピンや日本国内の問題を捉えること、さらには一つの問題を相関連する問題群の一つとして捉えることができるようになった。机上の学びと現場体験学習がつながったのだ！

フィリピンから帰国後、ゼミを国際協力NGOと位置付け、問題解決のための諸活動(学会での報告、絵画展、ODAへの政策提言等)を展開した。その過程で、問題を分析し解決策を提示していく力や自分の意見を論理的に話していく能力を身に付けることができたと思う。そして何よりも、こうした「発信」活動に対する社会からの様々な「返信」及び「人との出会い」の中で、学生である自分たちが地球的諸問題の解決において決して無力な存在ではないことを噛み締めることができた。それは私にとっての「学び」の醍醐味だった。

2月	・ゼミ4年生送り出しコンパ
3月	・平崎行雄記念財団米国派遣事業にて米国「ピースプライズフォーラム」へ参加 ・卒業
2001年度	
5月	・米国派遣事業の報告書を執筆(『世界と環境』2001年7,8号に掲載)
7月	・第二回「ホルスティー」合宿(理論学習合宿)
11月	・学園祭にて公開シンポジウム「社会を変える教育とは？高校・大学・社会をつなぐ～下羽ゼミ10年の成果から見えた学び方：生きる力・問題解決能力～」への参加
12月	公開シンポジウム　若者が21世紀の日北関係を築く～フィリピンにふれる、フィリピンに学ぶ」通訳として参加。ここで4つの政策提言を行った。現在提言の実現に向けて取組中
2月	・韓国スタディーツアー（下羽ゼミ間交流）へ参加。テーマは「若者が21世紀の日韓関係を築く～私たちが交流によって変わる、変える～」。
3月	・フィリピンスタディーツアーへ参加。目的はシンポジウムでの政策提言の実現へ向けての作業とゼミで刊行予定の本の執筆原稿のための調査活動
2002年度	
4月	東京大学大学院学環境創成学科環境国際政策コースへ進学

自分の考えを論文の中で思いっきり展開した。それが認められたことは大きな自信につながった。

卒業後はたびたびゼミでの議論にお加させていただき、後輩から学びながらも受験勉強をした。そして、念願の大学院合格。大学院では、問題解決型のNGOについて研究し、将来はNGO機関で働きながら、やがては地元福島に帰り、福島が抱える問題を生活者の視点から解決していきたい。

下羽友衛・東京国際大学国際関係学部下羽ゼミ著,1999,私たちが変わる、私たちが変える：環境問題と市民の力／学内・国内・海外での現場体験学習から,リサイクル文化社.

下羽友衛,1997,大学環境教育における「地球市民」育成の試み：手作りの「ゼミ」活動を中心とした実践と成果,東京国際大学論叢国際関係学部編,3.

下羽友衛,1998,「地球市民」育成のための大学環境教育の試み：学生主体の「共同研究活動」の有効性について,東京国際大学論叢国際関係学部編,4.

下羽友衛,1997,教育機関としての大学を再考する：手作りの「ゼミ」活動を中心とした「地球市民」育成の試み,環境教育,7(1).

下羽友衛,1998,大学環境教育の試み：「地球市民」育成の手作り「ゼミ」活動の挑戦,教育,634.

下羽友衛,1999,大学における環境教育実践,環境問題を学ぶ人のために,世界思想社.

下羽友衛,2001,意識と行動をつなぐ,歴史地理教育,619.

下羽ゼミⅠ～Ⅳ,2001,社会を変える教育とは？高校・大学・社会をつなぐ：下羽ゼミ10年の成果から見えた学び方:生きる力·問題解決能力,2001年度秋霞祭シンポジウム配付資料.